

キャンドルのつどい

キャンドルのつどい

- 歴史● 現在のキャンドルサービスは、昔からヨーロッパで、クリスマスの時に行われた宗教行事がアメリカに伝わり、戦後の日本ではその影響を受け、形を変化させ行うようになった。
- 意味● ロウソクの炎は、落ち着いた気分になり、集中して何か考える時や、人生の転換期などにおいて決心する人間の気持ちを引き締めたり、心新たにしたりする力を秘めている。
- ねらい● ロウソクの炎の1本1本が持っている意味を生かし、参加者1人1人が人間として人生における指針を学んだり、決意したり、仲間意識を作り上げているためのセレモニーです。
- 展開● ここでは基本的なものを例としてあげるのので、実際の展開にあたっては、話し合いなどを行い、工夫して企画してください。

●役割●

役割	内容	人数
火の長	つどいのまとめ役・代表者	1名(大人)
進行	進行係(エールマスター)	1~2名 (大人又は子ども)
女神	聖火奉持者	1名(大人又は子ども)
火の守	誓いの言葉をのべる	4名程度(子ども)
献詩	詩の朗読	1~2名(子ども)
音楽	音響機材の操作、進行の補助	1名(大人又は子ども)
照明	流れに合わせて、照明を調節	1名(大人又は子ども)
用具	燭台、ロウソク等の準備、片付け	数名(大人又は子ども)
その他	子どもや担任教師、指導者からお話をしてもらうのもよい	数名(大人又は子ども)

●用具●

物品	使用内容	数
ロウソク(大)	中央燭台用	10本程度
	女神から火の長に渡すもの	1本
	火の守が持つもの	火の守の人数分
ロウソク(小)	全員が持つもの	参加者の人数分
中央燭台	中央に据えるキャンドル台	1台
燭台	各個人が持つロウソク用(小)	参加者の人数分
	女神、火の守用(大)	人数分
用具	燭台、ロウソク等の準備、片付け	数名(大人又は子ども)
その他	子どもや担任教師、指導者から感想やお話しを してもらうのもよい	数名(大人又は子ども)

<演出・進行用のもの>

- マイク・・・・・・・・進行用
- 音源・・・・・・・・BGM、合唱用
- 衣装・・・・・・・・女神（ドレスなど）、火の長（服、杖など）
- ろうソク入れ・・・・・・・・終了後の回収用。バケツなど。
- 燭台入れ・・・・・・・・終了後の回収用。バケツなど。

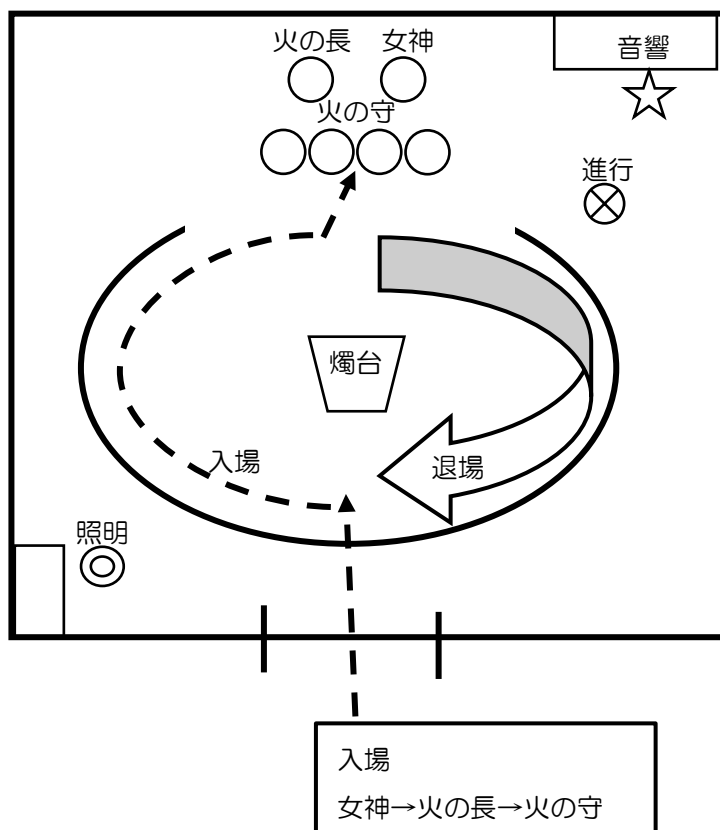
●構成●

<セレモニーとして>

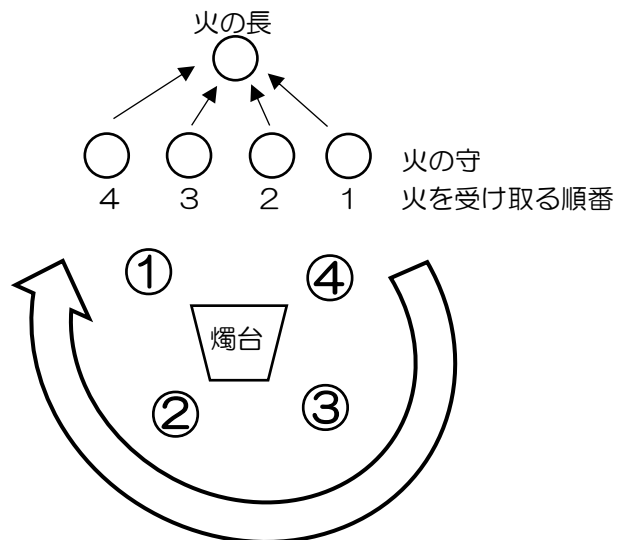
- (2部形式の内容) 第1部・・・ゲーム、レクリエーションなど
- 第2部・・・セレモニー（キャンドルのつどい）
- (3部形式の内容) 第1部・・・セレモニー（迎え火のつどい）
- 第2部・・・ゲーム、レクリエーションなど
- 第3部・・・セレモニー（送り火のつどい）

●隊形と用具位置●

<青年の家体育館の場合>



■火の長→火の守→中央の燭台への分火および点火の流れ



- 全員に分火する時は点火する範囲を火の守に分担させる。
- 点火してもらった参加者は隣の人に火を分け、全員が灯るようになる。

●指 導●

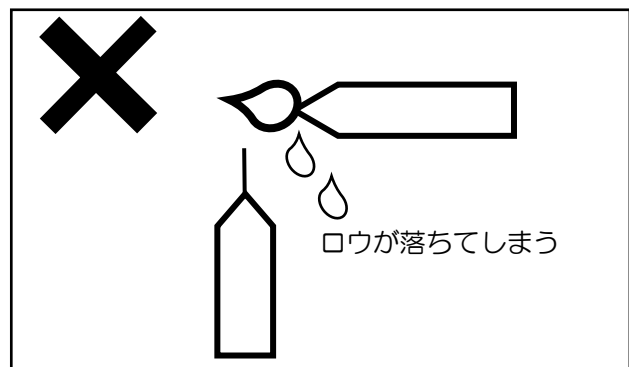
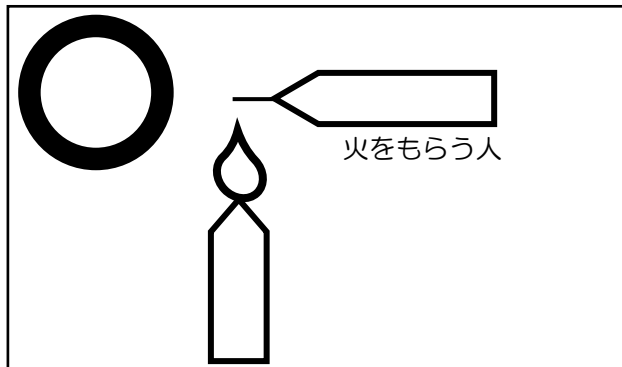
<事前指導> ■ろうソクの持ち方

きちんと立てて持つ。ろうが床に落ちないように気をつける。

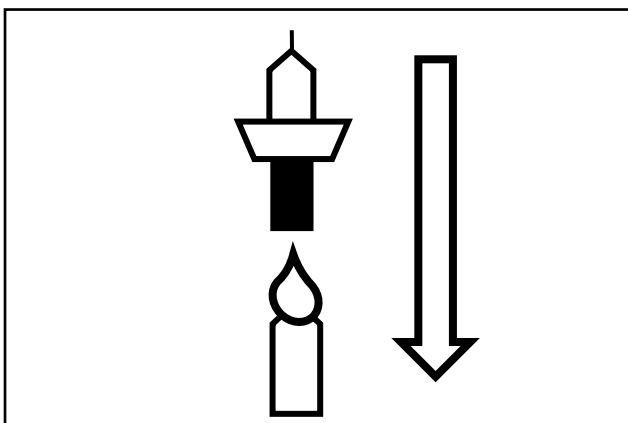
■火の付け方・消し方

ろうが垂れるのを防ぐため、火がついていないろうソクが、火がついているろうソクの火をもらう。

(火の付け方)



(火の消し方)



- ろうソクの受け皿の持ち手の底で火を押し消す。
- 吹いて消すとろうが飛び散ってしまいます。
吹き消さないようにしましょう。

●雰囲気づくり●

- ・静かな落ち着いた雰囲気を作ってから始める。
- ・事前にトイレを済ませる。(トイレ休憩をとり、セレモニーの隊形の準備やろうソクの配布などを行う。)
- ・セレモニーが終わったらすぐに電気をつけるのではなく、全体の雰囲気や状況を見て点灯する。

<入退場の方法>

- ・混雑を避けるため整列し、静かに入退場できるように工夫する。
- ・出口でろうソクと個人の燭台を回収する。

<留意点>

- ・あまり形式にとらわれず団体で工夫し、自由な雰囲気で行う。
- ・プログラムが長引かないように注意する。
- ・セレモニーで使用する歌などみんなで歌うものがあれば、練習しておくといよい。
- ・役割の分担や、実際のセレモニーを想定しながらリハーサルを行う。
(本番は暗転することを想定しておく)
- ・季節を考慮し、寒くない服装をする。

青年の家から

■事前打ち合わせ

入所する団体の代表者は、青年の家職員と事前に打ち合わせをしてください。
実施直前の打ち合わせは、お互いに混乱しますので避けましょう。

■協議事項

●事前準備にかかるもの

- ①入所する前及び入所してから、協議を行い準備してください。
- ②プログラム実施にあたっては入所団体で自主的に行うことをお勧めします。
(リハーサルや準備について、所員も一緒にお手伝いすることができます。)
- ③準備は事前に、入所中の午前中や、午後、夕べのつどいの前までに完了させてください。
- ④火を使うので、ロウソクの取り扱いや後始末など、管理は団体で責任をもって行ってください。
また、ロウが床に垂れないように指導を徹底してください。

●入所団体が行うもの

- ①プログラム実施のための具体的な準備及びリハーサルなどを含む直接指導。
- ②火やロウソクの管理
- ③実施後の用具及び施設の整理・点検及び返却

●青年の家ができること

- ①事前打ち合わせによる助言
- ②プログラムの企画・立案のための指導・助言
- ③事前の施設案内
- ④用具の貸し出し・取り扱い説明
- ⑤その他施設について・器具について

火の長のことば（迎え火）の例（その1）

今、女神によって聖なる火が、運ばれてきました。

火は、人間に与えられた貴重な宝物です。今日の文化も、火によって築かれてきました。

第一に、静かに燃えるこの火は、みにくいものを焼きつくす情熱の根源であります。

第二に、暖かさとお明るさを与えてくれるこの火は、愛情の根源であります。

第三に、闇を照らすこの火は、道しるべの役をはたします。

これらの火の教えを自分のものとして、どんな苦しみにも打ち勝ち、人を愛し、自分を磨き、立派な人間になってください。

みなさん1人1人の健やかな成長を願って、キャンドルのつどいを始めます。

火の長のことば（迎え火）の例（その2）

今、灯されようとしているこの火は遠い昔、私どもの先祖が火を使うことを発見してから、人類の文化を大きく育ててきた火であります。

そして、希望あふれる、未来を灯す火でもあります。

ここ、玄海青年の家での宿泊生活がいつまでも燃える炎のように、心の奥深く、美しく、楽しい思い出になるように、玄海の神にお祈りします。

火の長のことば（迎え火）の例（その3）

人々が、まだわずかな言葉と石と木切れの道具しか持たなかった昔、氷河が北の山々をおおい、谷を埋めて豊かな森を赤道のかなたからおいやったとき、草の実を求め獲物を求めてさまよう人々を冬の寒さから守り、夜の闇を照らして、その闇のかけから忍び寄り、襲い掛かる獣から守ったのが火であった。

火は人々にとって救いであり、力であった。憩いであり、神であった。丘の木立の広場に燃える火は、そこに人々の集いのあるあかしであった。

岩屋や、草ぶきの小屋からもれる火影は、そこに家族の安らぎと愛のあるしるしであった。

今、我々は、満ち足りた衣食住と豊かな文化の中の暮らしになれて、人と人の繋がりに欠けせぬ愛と、おきてを忘れようとしてはいないか。今宵、赤々と燃える火を囲み炎を見つめてもう一度本当の愛の温かさと集いのおきての厳しさを確かめあい、お互いの心に刻みつけようではないか。

自分の場所と役割をみんなの中に見出し、自分の持つ愛と力をみんなのために捧げる喜びを味わおうではないか。

火の長のことば（送り火）の例（その1）

この研修を通して、私たちは多くの友を得ました。

今まで赤々と燃えていた火も、小さな一筋の炎となっていまいました。

この火は小さいけれど、5本、10本・数10本と集まると同じ目的に向かって、がっちり手をとる灼熱の炎ともなるのです。

人は1人では生きられません。家庭でも学校でも、職場でも、多くの人と手を握り助け合って初めてお互いが自己の生活をより良く築き、社会に役立つ人となることができると思います。

この火はやがてみなさんの心に灯され、友情の炎として明るく輝き育てられることでしょう。

これからの人生には楽しいことばかりではなく、苦しいこと、悲しいこと、いろいろなことが落ち受けていることと思います。

その時は、この火とこの友を思い浮かべ友情の火を支えとして力強く生き抜いてください。

将来の幸福と健康を願いつつ、この集いを終わります。

火の長のことば（送り火）の例（その2）

一つの火は小さくても、それが集まった時には、偉大なものになることを学びました。

ともに歌い、ゲームに集中し、手を取り合って踊っているうちに、いつの間にか楽しかった時間も終わろうとしています。

この夜のこの火は、無限の可能性を求めてやまない少年少女の情熱にも似ています。

この灯は消えようとも心の中に灯された皆さんのキャンドルの火は、明るく輝き、いつまでも燃え続けることであらうでしょう。

献詩の例 (その1)

『思いやり』

私たちは思いやりの心を持ちたい
悲しそうな友だちには励ましを
寂しそうな友だちには楽しい話を
いじめられている友だちには見方がいっぱいいることを
自分勝手なふるまいをする友だちには勇気ある忠告を
ひとりぼっちでいる友だちには遊びの誘いを
そんな思いやりの心を私たちは持ちたい
私たちの学校で もし思いやりの心がなかったら
みんな無口で みんな無関心で みんな知らん顔で みんなバラバラで
みんな自分勝手な人たちになってしまう
私たちの学校生活に思いやりの果たす役割がどんなに大きいことか
ひとりひとりが笑顔をかわし ひとりひとりが語りあい
ひとりひとりが助けあい ひとりひとりが協力しあい
ひとりひとりが思いやる
そんな思いやりの心を 私たちは持ちたい

献詩の例 (その2)

『ふれあい』

腕を組み、手をつなぎ、肩を寄せあって、言葉をかわし、歌を歌って・・・
そこに、人と人とのふれあいがある。
涙を流し、慰めあい、肩をたたき、手を打ち合って、ともに笑い、ともに苦しむ・・・
そこにお互いのふれあいがある
ふれあいことの、お互いがふれあうことの、人々が、人の中に生きていくことの、
何と難しいことか・・・
ふれあいことの、お互いが、お互いの中に生きていくことの、何と楽しいことか・・・
心と心のふれあいを求めて、お互いの中に、お互いの共感を求めて
昨日まで生き、今日を生き、明日を生きていく。
ふれあいの中に希望を持とう。
心を開き、手を繋いで、我ら兄弟腕を組み、肩を寄せ合って
ふれあいの中に希望を持とう。

献詩の例 (その3)

『ともだち』

「おはよう」って いうときも
うつくしい心と心が感じあう ともだちだもの

「こんにちは」って いうときも
すこやかな心と心が通いあう ともだちだもの

「おやすみなさい」って いうときも
あたたかい心と心が通いあう ともだちだもの

心と心を結びあい 助けあい 支え合って 共に伸びていこう

「」小学校(年 組) すてきな学校(クラス)
明るく、楽しい みんなの学校(クラス)

献詩の例 (その4)

「勇気をもちたい」

私は 勇気をもちたい

よいものを よいと素直に認め にせもののささやきには耳をかさず
進むべきときには 進み 退くべきときをあやまたず
あやまちは 素直にわび くじけず なまけず

日々の向上に邁進まいしんしようとする勇気

そんな勇気を私はもちたい

私たちの生活に 勇気の果たす役割が どんなに大きいことか
勇気がないばかりに よい機会をのがし
優れた才能を埋没させ 尊い命を断ったり
社会に悪をはびこらせたりする 私は知恵のある勇気をもちたい

献詩の例 (その4)

「わたしたち」
ひとりがこまれば みんながたすけ
ひとりの問題を みんなで考え
ひとりの喜びを みんなでよろこび
肩をたたきあいながら進む ぼくたちです
ひとりの足りないところは みんなで補い
ひとりが進めば よくしあいつつ
肩組んで進む わたしたちです

献詩の例 (その5)

「キャンドルの光」
暗闇の中に 一筋の光が走る
わたしたち()名 心の結ばりを深める
こよい キャンドルのつどい
火は その昔 幾万年もの昔
わたしたち人間のくらしの中に取り入れられ
人間の文明を生む 源となった
火は暗闇に光を与え
冷たくとざされた 身のまわりをあたため
心を開いてくれる
火は人間の産業を起こし
わたしたちのくらしを支える
しかし 火は すべてを焼きつくし滅ぼしてしまう
人間の歴史の中で
幾百万の人が 火のために 命を絶たれ
また 泣いたであろうか
わたしたちは この火を
社会の平和のために生かし 使わねばならない
一筋の光は
幾筋もの光となって世の中を照らし
小さな熱は
寄り合って 大きな熱となり
人の世をあたためる